思い出を語る

白球と青春の想い出

山崎長一

白球と青春などと書くと、いかにもキザっぽく聞こえるが、歩んだ人生のうちで情熱をかたむけ白球を追いかけた、ある青春を回想するにはよい機会と考え敢えてこんな書き出しとなったことを大目にみて戴きたいものです。

太平洋戦争にピリオドをうち、人びとがやっと平静をとり戻しかけていた昭和２１年、私は、新田ベニヤ十勝工場に勤めておりました。そんな折、バレーボールの話がもち上がり、愛好者が集ってチームを編成したものです。

私は、帯広航空廠時代唯一のスポーツとして習い覚えた経験を生かして一員に加えて貰ったわけです。困ったことには、少ない食べ物、ユニホームや場所等がない事でした。食べ物はともかく、用具が無くてはどうにもなりません。そこで澱粉袋を改造してのユニホーム、会社に泣きこんで揃えて貰った用具一式で、工場内の空地を利用しての練習が始まったわけです。と言っても指導者が居るわけではなく、自己流の練習方法で対戦相手を求めては、池田や帯広に自弁での遠征練習を続けたものです。それでも十勝地区では、常に優勝か上位で道東地区大会や全道大会に駒を進めることの出来たことは、気ちがいじみた練習とチームワークの良さではなかったのかと思います。

雨の日は工場倉庫の中で、冬は雪中バレーと称し、ともかく年中ボールを離さなかったことです。当時の新聞切り抜きによると「新田チームは、平塚兄弟、山崎らの好技もさることヤ乍ら一糸乱れぬチームワークは全く練習の賜物で他を圧していた。」との戦評でも、田舎チームでありながら、勝ち続ける要因を認めたものと思います。

白球にかけた青春！　しかし、そのバレー部も昭和２５年頃の不況のあおりをうけ、自己退社や本州転勤等で部員も少なくなり、新部員を加え乍らも退潮の一途をたどり、自然消滅の浮き目をみたことは極めて残念でたまりません。

剣道の想いで

山口秀勝

先ずわが町の体育連盟のことについてふれてみたい。　町体育連盟の発足は確か昭和３０年頃であったように思う。往時は体連の運営費は自分達で捻出し現在のように町費の助成は全くなかった。捻出の方法は殆んど映画会開催による収益で、会員みんなが分担して入場券の売りさばき、橘劇場を買切って映画会を催したものである。当日は係も分担して行ない、木戸番から終った後の劇場内の掃除までみんなで協力しながらしたものです。

今振り返ってみるとつい近年の出来事のように思われるが、早や２０数年を経過している。自分達

が自ら苦労して運営費を捻出していたので、会員相互の親近感、連帯感が強く非常に楽しかった印象が想い出されます。

さて剣道部の関係ですが、終戦後剣道が台頭したのは昭和２９年からである。敗戦占領下においてようやく極東軍司令部から剣道がスポーツ競技として許された訳ですが、従来の武道としての剣道でなく、一定の時間内に打突部位をどちらが多く打突するかというものでありました。

どういう形にしろ、剣道が陽の当るところで堂々とできるということで、剣道関係者は小跳りして喜んだものであります。

本町における戦後初の剣道の起こりは、矢張り２０年代後半の頃だったと記憶します。戦前活躍された人達が集り幕別小学校屋体で練習した想い出も懐しく思います。

当時の顔ぶれは、目黒　盛・廻淵　茂・小山義男・松浦俊行・品田　信・大久保正司　等、各氏の外に数名の方々がおられたのですが思い出されません。

その後昭和４０年頃から町内の各地で少年の剣道熱が高まり始めます。最初は40年に、千葉恵博（幕中）・十河暢明（幕小）の両先生が２人で私のところにこられ、児童・生徒に剣道の指導をして欲しいという申し出がありまして、大久正司・高橋秀昂・橋本正司の各氏も加わり指導に当ったのが剣道スポーツ少年団の始まりである。

その後糠内中で後出晃治氏、白人中で上山長五郎氏、古舞小中で中村信雄氏・若山進氏、中里小で山口武一氏・池田正勝氏、白人小で鳥羽誠市氏等がそれぞれ指導に当り、本町の少年剣道の発達に大きく貢献したのであります。

一方、一般社会人の方は、山角芳信・大久保正司・高橋秀昂・橋本正司・寺岡徹男・山田一徳・妹尾英美・下　直弘・橋本伸也・佐藤俊克各氏の本町定着者は自己の術の練磨に精進しながら、青少年の健全な育成のため剣道の指導に情熱を傾注し、現在に至っているわけですが、道民スポーツ十勝大会では例年上位入賞して、剣道幕別の名を挙げている実績は大きいものがあります。

剣道は各種スポーツの中で一番寿命の長いスポーツです。本町剣道の伝統を後世まで継続するためにも青少年の方の積極的な入会を特に歓迎いたします。

思　い　出

庭　球　協　会

幕別テニス協会の力量は、現在十勝のトップクラスにいる……。　さて、思い出といえば、やはり団体戦であろう。２年前の全十勝加盟団体の時である。幕別協会は決勝で帯広協会と対戦した時、１対１でむかえた最終戦リードしながらも、優勝を逃がしてしまったくやしさ…。もう一つは、幕別協会が提案した十勝町村対抗で、１対１でむかえた３試合目、マッチポイントを５回も取りながら、優勝を逃がしてしまった時の残念無念は、記憶に新しい！　それら数々の試合の興奮が、今でもよみ返って来る。なお、もう一つの楽しみは、各大会が終ってからの反省会である。テニスコートの側のくさむらで、生ビールとジンギスカンによる友好と、優勝できなかったくやしさを語り合う。
それは、春には桜の花びら、秋にはポプラの葉が舞う……。

私とスケート

中条静子

私がスピードスケートに乗り始めたのが小学校2年生、その年の十勝大会に出場、2位の成績であった様に記憶している。

私の小学校時代は、今のように立派な町営リンクも、少年団もなく、常に父と二人の練習でした。練習場所は、小学校のリンクで小さな所に大勢の子ども達が遊んでいるのですから、思い切った自分の練習をする事は無理でした。そんな状態の小学校時代でしたから成績もあまり良くなく、小学校最後のシーズン「今年も成績が上がらなかったら6年生で止めよう、最後だと思って頑張れ!!」と言う父の言葉を噛み締め、望んだ大会に初優勝。

それがきっかけとなり、スケートを続ける運命となったのです。中学校に入ってからも、思い切って練習できるリンクも仲間もいません。そこで考えた父は、自宅から少し離れた猿別の沼をリンクにする事を考えました。沼ですから、よしが茂っています。木の根もあります。それらを夏のうちにきれいに取り除き1周250メートルのリンクを造る事が出来ました。シーズンはじめ、早くから氷が張り、思いがけない私の練習場所となったのです。父に握られたストップウォッチと記録簿が私の練習相手でもありライバルでもあったのです。

幸か不幸か、私の周囲にはスケートをする人がいなかったので、この1人で練習するという事が自分の力で走るという底力をつけてくれたのです。人の後に付いて滑る事がどんなに楽な事か、その頃の私は知らなかったのかもしれません。なにしろ人の後に付いて練習した事のない私にとって、前に人がいると邪魔になり、あぶなくて自分本来のスケーティングが出来なかったのです。ですから大会においては500 Mは勿論、1,000 M、1,500 Mにおいても終始トップを引き、ゴール前同タイム、もしくは負ける事もありました。しかし500 Mだけは、だれにも負ける事がなかったので、お蔭で中学校時代3年間は、どの大会をみても総合優勝できなかった大会は一度もなかったはずです。

それは高校に入ってからも、この中学時代の練習が基礎となり、全道大会・全国高校選手権と、1,000 M種目においては3年連続優勝という、史上3人目という名誉な記録を残すことが出来たのです。体の大きさこそ恵まれていたとはいえ、体も硬く、柔軟性に欠け、技術的にも、フォームも成っていない私が、中学校そして高校時代と負けることなく勝ちえてきたのは、ただひとつ、練習量でだれにも負けなかったという他になにもないのです。

毎日朝5時起床、中学・高校とも登校前に暗いうちから氷の上に立っていたのです。「人の上に立つには人と同じ事をしていたのでは同じ結果、人いち倍努力すること・練習すること」と父から教えられ実行させてくれた父がいたからなのです。今、中学・高校をふり返った時、たしかに高校のトレーニングは厳しく苦しいものでしたが、苦しみを分け合う仲間・先輩がいた。しかし、なにもかも一人で耐えなければならなかった中学校時代は本当に苦しく辛く、シーズンを長く感じていたのです。それだけに高校3年の全国高校スピードスケート選手権大会において、大先輩も成しえなかった全国総合優勝を部員と共に我が大谷高校に持ち帰れた事は6名の選手、2名のマネージャーと共に選手生活最大の思い出です。　私がこのような素晴らしい思い出をつくれたのも、多くの人の応援と、家族の協力、そして父の大きな力があったからなのです。シーズン中大雪が何度も降りましたが、家族総

出で夜なかまでかかってリンクを開けました。私は翌日の朝から練習する、そのくり返しだったのです。

そんな家族と離れて、卒業後は長野県三協精機株式会社に入社。ほとんど会社の仕事をすることもなく、シーズンオフから合宿、合宿の連続。１０月の中から氷上のトレーニングに入りシーズンの終る２月末まで合宿地を点々と変え、また各大会地にのぞむという状態でした。

この実業団の選手生活は、自己との戦い、肉体の限界への挑戦。シーズン中よりもオフシーズンの体力づくりのトレーニングのきつかったこと……。ギラギラ輝きつける太陽の下で、このまま倒れてわからなくなった方がどんなに楽になるか……。脈拍200、このまま死んでしまうのではないだろうか、倒れたって暑くて胸元をかきむしるだけ、苦しさは消えない。暑さには陸トレにも弱かった私にとっては、なんとも言い表すことのできない毎日でした。

こうして迎えるシーズンでしたが、記録的にも満足の出来る結果がえられず苦しい時代でした。精神的にも、肉体的にも、これだけの苦しみ、圧迫感がこれからの人生にあるのだろうか？

これからの人生に三協時代に味わった以上の苦しみはないのではなかろうか。もしあったとしてもこの三協精機時代を思い起こせばどんなことにも耐えていけると確信しています。

スケートをやっていたおかげで人には経験のできないことまでさせていただきました。色々な人からあたたかい応援をいただきました。勇気づけられ、励まされ、自分の力を知ることが出来ました。

三協精機の２年間を最後とし選手生活に終止符を打ち、懐しい北海道、そして私を育ててくれたこの幕別町で生活できることを本当に幸せにおもっています。

熱球の想い出

中　村　　修

昭和６年誕生のあけぼのチームに参加が野球の始まり。好プレーに観衆とチームに入る者が増加、他村チームとの交戦がファンを沸す。新田、治水（現土木現業所、当時在統内）、市内チームの３強が充実して覇を競った頃は帯広からも観客が来た。Ｙ選手の父親は白熱戦に居たたまれず、応援団を抜け出して激戦の最中に神棚に燈明、勝利を祈願し、又治水対新田の優勝戦に新田に凱歌が上がったとき、勝利祝に酔った応援団の数人が夜陰駅頭で治水の一団に襲われ大乱闘を演じ、多数の負傷者を出す武勇伝まで起きたのである。３強の戦は次第にレベルを高めていった。札幌在住時に円山球場で十勝代表幕別チームを観戦したが、延長の末釧路鉄道局を破り王子製紙に惜敗した一戦は、全道ファンを熱狂せしめ、又帯広で行われた全道大会で優秀チームを連破準優勝して全道民に村を紹介した。現在立派な選手が続出して活躍しているが、これは歴史ある野球ファンの産んだ熱球と信じ度い。

卓球の思い出

藤　平　景　夫

昭和１８年新設されたばかりの池田中学校（現、池田高校）へ第１回生として入学した私達は、戦時態勢の真只中とあって勉強は二の次で、農家へ援農にかり出される毎日だった。中学３年の８月、やっと終戦となり分宿先の農家から建設途中の学校へ戻って来たものの、衣食住すべて無い無いづくしの中で学校へ行っても何をやったら良いものやら解らないまゝ漫然と通学しているのにすぎない毎日だった。そんな折、当時体育の先生だった清水先生（後の幕別高校校長）が私達にくれた半打の卓球ボールが私と卓球への繋がりの始めとなった。

卓球のルールは教わったものの卓球台もラケットも無いという訳で、放課後机を並べて黒板拭きやらベニヤ板をくり抜いてラケットを作りどうにか卓球をやっていると云う状態だった。又、当時のボールは品質が悪く少し強く打つとすぐ割れる仕末で、新しいボールを買うにも金がないので薬局へ行って酸を買って来て割れたボールを接着して何回も使ったものだった。当時の私達の卓球は、卓球ではなくピンポンと云う言葉がピッタリする状態だった。そんな私達が喫驚りしたのが昭和２２年頃幕別小学校に長谷川先生が来られた事だった。スポーツ万能の先生だったが、何と云っても卓球では後に全道チャンピオンになり全日本の大会で２位になった程の人だった。当時幕小の先生だった藤田・今本・板垣先生達とやっている卓球を初めて見た時、此れが卓球と云うものだと思うと同時に、バラック作りの体育館に学校でやっと購入してくれた卓球台で前記先生達のフォームを思い出しながら、ピンポンに別れをつげて卓球に取り組みだしたのである。当時同級生の国安君・富西君と３人で毎日学校が終わって汽車の時間まで練習を始めた。夢中でやっていて汽車に遅れる事は毎度の事で池田から幕別まで歩いて帰えるしまつ。と云っても１、２年の頃毎日４Ｋから５Ｋ近くの道を歩いて援農に行っており、又教練の中で１時間近く走らされる事は毎日の様にあった為か、さほど苦にもならないで帰って来たものだった。

たった１台しかない卓球台に３０人もの部員がいては仲々満足する様な練習も出来ず、下級生からは台を独占しているとクレームが出てくるし、結局時間をきめてやる事にした。これではとても練習にならないので国安・富西両君と学校が終わるとすぐ帰って幕別小学校へ行き先生達の練習が終わった後、台を借りて練習をする事にした。最初の頃は当時小学校の用務員だった曽我部さん（だと思う）から玄関を閉めるから早く帰れと怒られたものだったが、あまり毎日行くのであきれてしまったのか「帰る時は台を片付けて帰りなさいよ。」と云われた時は本当に嬉しかった。

そのうちに腕の方も少々上達して小学校の先生方と対等に戦える様になって来た。先生方も良い対戦相手が出来たものだから今度は先生方からお呼びがかゝる様になり、平日は勿論、日曜日は朝から晩まで白球を追い続けるしまつで、家に帰ると父や母から怒られる日も多くなり出した。中学４年の秋、戦後復活した全十勝中学校卓球大会に初めて参加出来る事になった。当時の新聞では元大学選手権でチャンピオンとなった山田と云う人がコーチをしている帯中（現、柏葉高）と今木先生がキャプテンをしている帯工（今の定時制）が優勝候補のトップに上げられていた。その帯中を３－０で破り決勝戦で帯工と対戦、大接戦の末２－３で破れはしたものの、池中始まって以来の快挙だと学校上げて祝福された時は、国安・富西両君と嬉し涙にくれたものだった。帯工は全道大会で準優勝しており

今思えば何としても勝ちたかった。その後、卒業までの間全道大会に出場したが、まだまだ食糧事情が悪くて札幌まで夜のドン行列車で8時間もかかり、リュックサックには弁当と米を入れて行かなければならず、ユニフォームは人絹のペラペラで汗をかくといっぺんに色が落ちるしまつ、運動靴なんて全然ないので軍隊の払下げの指の無い地下足袋と云ういでたちが当時の姿だった。

高校卒業最後の大会で国安君と組んだダブルスで全道3位となったのが最高の記録だった。卒業後も国安君と後輩の指導に暇を見ては行ったが、昭和26年全道大会に優勝した彼等が四国の丸亀で行なわれた全日本の大会で準優勝した時はやっと苦労がむくわれたと思った。

此の頃は幕別でも卓球熱が盛んで、新田ベニヤでは森田（新栄商会）・土居・小島・堀切・橋浦・坂本さん、役場では福田・若原・二川辰・二川勝・林・中村・杉山・小椋さん、小学校では小畑・中川・藤根さん、女性では秋山・石田・岡本さん等、私の同級生の国安・富西君、良きライバルがひしめきあって全幕別卓球大会等も度々開催された。

昭和26年か27年頃、釧路で開かれた東北海道都市対抗卓球大会に前記小畑・藤根・中川・国安君と幕別チームで出場し、根室市・釧路市を破り決勝で長谷川先生等の帯広市と対戦、破れはしたものの町村チームで準優勝し、個人シングルでは私が長谷川先生と決勝で争い2位となり、ミックスダブルスで優勝、大いに幕別町の名を上げたものだった。これで自信がついたのか此の年十勝大会でシングル3連勝し、男子ダブルスでも国安君と度々優勝、此の年十勝ランキングでシングル・ダブルス共に1位となったのが最高の思い出となった。

戦後の何もない時に苦労した当時の事を思い出しながら、当時現在の様に物がありあまっている様な時代であったら果してあれだけ練習をやったろうかなあと思いつゝ想い出を終わらせたい。

思　い　出

榎　本　梅　谷

もう半世紀もの昔、今思えば日本経済の最もどん底、最高の不況時代の昭和初期。それでも若者達は、スポーツを愛し続けた。殊に野球に関しては町内に新田ベニヤチーム、統内機械工場チーム、亜麻会社チームと、職場チームが幾つもあったが、一方では街の床屋さん、魚屋さん、ブリキ屋さんだとか、若主人などが集ってのクラブチームもあった。

当時は、全道的にも少年野球の隆盛な時期を迎えつゝあった折で、やがて帯広の「柏校」が全道優勝を成し遂げ、帯広・十勝の野球ファンが血沸き、肉躍るの時代でもあった。そういう時代であったので帯広・十勝の社会人野球もより隆盛を極めた時代であった。

当時帯広市内には、柏校出身者を中心にした「柏門クラブ」、志田病院長の率いる「志田チーム」郡部では、芽室・本別・止若と各チームが相拮抗していたが何日の大会でも郡部チームは優勝することが出来ず涙を呑んでばかりいた。

そんな時代の昭和１２年の秋、もうシーズンオフになろうとする時期になって、どういう風の吹き廻しか「止若クラブ」の監督になってくれということになった。それからは、いろいろデスカッションもやった。そして十勝大会で優勝するためへの３年計画も樹立した。各人の技術の向上については勿論であるが、どうしたならばチームとしての〝総合力〟を試合で発揮することが出来るのか、守備にしても、攻撃にしても、どうすればチームプレーに徹することが出来るようになるのか、真剣なミーテングも続けた。それでも来る年も、行く年も負けが重なり毎年のように悔し涙を流し続けた。それが３年計画の５年目、昭和１７年の十勝大会で仇敵、柏門クラブを破って優勝旗を手中に納めることが出来、全道大会へ駒を進めることが出来た。

その年の全道大会では、一次戦は１対０で釧路の釧鉄クラブを屠ることが出来たが、準決勝では惜しくも苫小牧王子と樺太との連合軍に２対１で負け優勝は出来ず、札幌の円山球場で口惜し涙を流したものである。

それにしても今おもえば楽しい思い出であり、チームのうち何人かは戦争の犠牲者となりこの世には居ないが、４０年振りに残る者が一堂に会し久濶を叙し度いものであると、深く心に想う今日この頃である。